

昭和モダンと文化翻訳：エロ・グロ・ナンセンスの領域

波瀲, 剛
九州大学大学院比較社会文化研究院准教授

<https://doi.org/10.15017/16394>

出版情報：九大日文. 13, pp.47-63, 2009-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：



昭和モダンと文化翻訳

——エロ・グロ・ナンセンスの領域——

NAMIGATA
TAKASHI
波瀲 剛

一、本稿の目的

文学研究において、「モダニズム」とはある意味で定着した概念である。それは一九世紀末から二〇世紀前半にかけての欧米における革新的な文学・芸術運動を指す。したがって、日本近現代文学における「モダニズム」を考察しようという場合、当然、それは日本の「モダニズム」が西欧のそれからどのような影響を受けたのかという点に注目することになり、起源／派生という図式でとらえることが多かった。

それに対して、近年日本における独自の変容に重点を置き、大正から昭和初期の作品に新たな光を当てようとする試みが活発になった。海野弘・川本三郎・鈴木貞美共編『モダン都市文学I〜X』（平凡社、一九八九〜九一年）をはじめ、ゆまに書房による復刻『現代の芸術と批評叢書』（一九九四〜九五五年）、『文学時代』（一九九五〜九六年）、『新鋭文学叢書』（一九九八〜九九九年）、『新興芸術派叢書』（二〇〇〇年）はその例である。

最近ではさらに領域が広がり、和田博文監修『コレクション・モダン都市文化』シリーズ（ゆまに書房、二〇〇四年〜）による資

料の発掘・紹介をはじめとして、昭和初期のさまざまなテクストに触れる機会が増えてきている。このような動向は「モダニズム」という枠組みが、文学・芸術にとどまらず、文化現象全般に及ぶという性質上当然であろう。また資料の復刻と同様、研究書に關しても一九九〇年代以降活況を見せている。たとえば、岩本憲児編著『日本映画とモダニズム 一九二〇〜一九三〇』（リブポート、一九九一年）、鈴木貞美『モダン都市の表現——自己・幻想・女性』（白地社、一九九二年）、和田博文『テクストの交通学——映像のモダン都市』（白地社、一九九二年）、初田亨『カフェーと喫茶店 モダン都市のたまり場』（INAX出版、一九九三年）、秋田昌美『性の狼奇モダン 日本変態研究往来』（青弓社、一九九四年）、澤正宏共編『都市モダニズムの奔流「詩と詩論」のレスプリヌーボー』（翰林書房、一九九六年）、馬場伸彦『周縁のモダニズム モダン都市名古屋のカラーージュ』（人間社、一九九七年）、図録『モボ・モガ展 一九一〇〜一九三五』（神奈川県立近代美術館、一九九八年）、渡辺裕『日本文化・モダン・ラプソディ』（春秋社、二〇〇二年）、川畑直道『紙上のモダニズム 一九二〇〜三〇年代日本のグラフィック・デザイン』（六曜社、二〇〇三年）、橋爪紳也『モダニズムのニッポン』（角川選書、二〇〇六年）、竹内民郎共編『関西モダニズム再考』（思文閣出版、二〇〇七年）、ミツヨ・ワダ・マルシアノ『ニッポン・モダン 日本映画一九二〇・一九三〇年代』（名古屋大学出版会、二〇〇九年）など、諸分野において「モダニズム」の見直し作業が進められている。したがって、文学における「モダニズム」の再評価は、美術史、

映画史、社会学、メディア論、歴史学などの成果と歩調をともにしてきたといえる。

このように再評価が活発化するなかで、「モダニズム」という概念そのもの、あるいは「モダニズム」の生成にともなうて発生、流通した概念に関する見直しも行われている。日本の場合も、欧米と同様「モダニズム」の時期や内容は諸説あるが、本稿が注目するのは「モダン」という語が流行した昭和初期である。またその時代を代表する「エロ・グロ・ナンセンス」という概念は、日本の「モダニズム」について考える格好の視座となる点で重要だと考える。ミリアム・シルババーグの論文「エロ・グロ・ナンセンスの時代——日本のモダン・タイムス——」（『岩波講座 近代日本の文化史 七 総力戦下の知と制度』岩波書店、二〇〇二年）は、「エロ」、「グロ」、「ナンセンス」の三要素を以下のように定義している。まず、「エロ」は「性的に乱れた議論や、女性の（時には男性の）体の線」を指すばかりでなく、「多様な官能的満足や身体的表現性、社会的親密さの肯定」を意味する。そして、「グロ」は「奇形の、あるいは卑猥な犯罪性と結びついていたが」、「社会的不平等、およびそこから発生する、不景気によって限界づけられた消費文化のなかで生きる人々の社会的実践に結びつけ」られる。さらに、「ナンセンス」は「スラップ・スティック・コメディの魅力に対する省察」であるだけでなく、「欧米の習俗に支配されている近代性によってもたらされた変容、といったテーマを扱う、政治的なアイロニック・ユーモア」だとする（六七〜六八頁）。

稿者もこうした動向と問題意識を共有するものであり、著書『エロティック・グロテスク・ナンセンス』（Miriam Silverberg: *Erotic Grotesque/Nonsense: The Mass Culture of Japanese Modern*, Times Berkeley: University of California Press, 2006）へと展開する考察に大いに示唆を受けている。だがその一方で、論の中心的话题となる「浅草」からさらに範囲を広げて検討を試みたいと思う。というのも、前掲『コレクション・モダン都市文化』で「エロ・グロ・ナンセンス」（第一五巻、二〇〇五年）の巻が登場し、考察の範囲を拡大する素材が提供されているばかりでなく、韓国でも「エロ・グロ・ナンセンス」近代刺激の誕生（ソ・レソプ著、サルリム出版社、二〇〇五年、ソウル）という著書が刊行され、韓国における「エロ・グロ・ナンセンス」の受容が問題となっているからである。特に後者の存在は、すでに知られている上海モダンとの関係を視野に入れるとき、東アジアにおける「モダニズム」の交渉が問題となっていることを示す。すなわち、歴史的文脈に注目した場合、「エロ・グロ・ナンセンス」の生成過程における文化の政治学が、欧米文化の翻訳という側面ばかりでなく、東アジアにおける「モダニズム」の翻訳とどのような接点を持つかが大きな問題として浮上するのである。

したがって、先ほど列挙した著書や、モダニズム研究会『モダニズムの越境Ⅰ〜Ⅲ』（人文書院、二〇〇二年）、『岩波講座 近代日本の文化史 六 拡大するモダニティ』（岩波書店、二〇〇二年）、五十殿利治・水沢勉編著『モダニズム／ナシヨナリズム一九三〇年代日本の芸術』（せりか書房、二〇〇三年）、科学研究費

補助金研究成果報告書『東アジアにおける植民地的近代とモダンガール』（研究代表者 館かおる、二〇〇七年）などに導入されているポスト・コロニアル理論の視座が、「エロ・グロ・ナンセンス」についても有効となるだろう。

議論の前提として想定しているのは、レイ・チョウ著『プリミティヴへの情熱 中国・女性・映画』（糸橋哲也・吉原ゆかり訳、青土社、一九九九年）において、文学者魯迅に関するエピソードから、中国における「近代」の始まりを映画という視覚メディアの衝撃と文化の危機に生じる「原初への情熱」によって記述する第一部の議論と、「モダンイズム」と「プリミティヴィズム」の共犯関係から議論を発して、ポストコロニアル世界における「文化翻訳」の可能性を探る第三部の論考である。そのなかでも、「文化翻訳は、ある特定の言語もしくは表象の型には統合不可能であるような様々な記号システムを展開する多様な社会グループ間の共時的な交流と闘争」（二九三頁）という定義が、「昭和モダン」の生成を論じるうえで非常に参考になると考える。

こうした点を踏まえて、本稿では、(1) 昭和モダンを特徴づける用語である「エロ・グロ・ナンセンス」が、どのように発生し、定着していったのか、そして、(2) 「エロ・グロ・ナンセンス」という概念が、他の東アジア地域における「モダンイズム」の動向とどのように関わり、互いにどのような文化翻訳がなされていたのかという二点に関して、仮説的見解を述べつつ今後の研究課題を指摘したいと思う。

二、辞書のなかの「エロ」、「グロ」、「ナンセンス」

「エロ・グロ・ナンセンス」の流行は一九二九年から一九三一年ごろだとされる。その流行ぶりについて知るには、別冊太陽『乱歩の時代 昭和エロ・グロ・ナンセンス』（平凡社、一九九五年）における諸論考や、前掲書『コレクション・モダン都市文化 一五 エロ・グロ・ナンセンス』に収録された『現代猟奇尖端図鑑』（新潮社、一九三二年）、『変態風俗図鑑』（時代世相研究会、一九三一年）や雑誌『犯罪科学』、『中央公論』における記事の内容、また、巻末の関連年表に記載された同時代事象と主要資料群が手がかりとなる。本稿はそこで提示されている膨大な資料群の吟味に取り掛かるためにも、ひとまず語彙レベルに立ち返って、三つの要素が結びつくまでの段階を押さえる必要があると考える。そのために、一九一〇年代～一九三〇年代の新語辞典を集めた、松井栄一・曽根博義・大屋幸世監修『近代用語の辞典集成』（全四一巻・別巻一、大空社、一九九四～一九九六年）を参照してみると、以下のようなことが分かる。

まず、「エロティック」と「グロテスク」に関しては早い段階から登場する。具体的には次のように定義している（旧字体の漢字は適宜新字体に改め、それぞれの用語の冒頭に○印をつけている）。

● 『新文学辞典』 生田長江、森田草平、加藤朝鳥編、新潮社、一九一八年三月

○エロチック (Erotic) 恋愛的。又は恋愛文学等と訳す。(三

一頁)

○グロテスク [Grotesque] (英) グロテスクとは如何なるものを意味するかといふに、人間が自分の生命力を正当の道に向けずして、力はあるながら、それを歪めたまがつた方向へ転せしめ、そして奇怪な厭ふべき生活の姿をしてゐることである〔後略〕。(六七頁)

●『現代日用 新語辞典』小林篤里編、文芸通信社、一九二〇年二月

○えろてつく [Erotic] 英) 恋愛的、恋愛に関する又は恋愛文学と訳す。(三九頁)

○ぐろてすく [Grotesque] 英) 狂妄なる、異様なる、奇異なると訳す。(九三頁)

二つの例のように、「エロティック」は「恋愛」または「恋愛文学」を指し、「グロテスク」は「奇怪」や「奇異」なものを指すという定義はその後も基調をなす。だが、昭和に入ると徐々に変化を見せている。以下に挙げる例では、「エロティック」に「色情」「色っぽい」といった意味が付加されている。

●『文芸大辞典』菊池寛校閲、斎藤竜太郎編著、文芸春秋社、一九二八年六月

○エロティック (英 Erotic) 恋情的。色情的。色っぽい等の意。ドオデエの「サフオ」やゲエエの「若きエルテ

ルの悲しみ」や近松秋江の「黒髪」やは、エロティックな作品である。エロティックは又恋愛詩、恋歌等をも云ふ。(八八頁)

○グロテスク (英、仏 Grotesque 独 Grotesk) 元は羅馬時代の洞窟内にある裝飾を云つたものであるが、転じて不自然、不合理、荒唐、怪異などの形を云ふやうになつた。(二八三頁)

この傾向は一九三〇年に入つてより明確になり、「エロ」「グロ」という略語化が生じて、両者の意味が接近する。また、「ナンセンス」の項目が登場するのも同じ一九三〇年のことである。特徴的な事例を挙げてみる。

●『モダン語辞典』モダン語辞典編輯所編、弘津堂書房、一九三〇年一〇月

○エロチック (性) 性欲的、略して「エロ」と云ふ。(三八頁)

○グロテスク 変態的、変足的、時に性欲的の意にも用ひられる。例へば「彼の小説は実にグロテスクだ」等と略して「クロ」(マ)と云ふ。(七八頁)

○ナンセンス 一定の意味のない事、内容の空粗で軽い事。「彼の小説はナンセンスだ」等と云ふ。ナンセンスは最近における一傾向である。(一九六頁)

●『モダン用語辞典』喜多壯一郎監修、麴町幸二編、実業之日本社、一九三〇年一月

○エロ エロテイックの略。(その項参照)「あの映画はエロそのものだ」とか使はれる。或る洒落た男が、エロはいろだ、「エロい目付」とは「いろつばい目付」だと。(七二頁)

○エロチック Erotic 英 古代ギリシヤの神話にある恋愛の神様エロスのやうなといふことで、恋愛的とか色魔的とか、もつと突込んで云ふと、肉感的とか淫蕩的とかの意味。文明とエロチックとは平行するものであると云はれ、現代はエロチック時代等と云はれてゐる。「あの女はやけにエロチックだ」「現代はスポーツと映画とエロチックの時代だ」とか使はれるが、略すことの好きな日本人はエロと略して盛んに用ひる。(七三頁)

○グロ グロテスクの略。このグロとエロ(その項参照)とは一九三〇年□(原文二字空き)傾向の一つで、文明になるに従つて、この二つが盛んになる傾きがある。「あの女はとてもグロだ」等と用ひられる。「グロテスク」の項参照。(七二頁)

○グロテスク Grotesque 英 元来狂妄な人物や空想的動物を挿入した異様な題材を取扱ひ、又はアラビヤ風の模様を表はす処の絵画描写又は彫刻の裝飾方式を云ふ。

中世紀の彫刻は異常な手腕を以て此のグロテスクな題材を取扱つて居る。此裝飾法の趣味は、文芸復興期中に行

はれたレオナルド・ダ・ヴィンチやアファエロのグロテスクな作品に、現在も尚残して居る。十七世紀に於いて、テニエールやカロがファンタステイックな情景をよく描いて居たが、その中ではグロテスクな風格が主なる要素となつて居る。普通には怪奇的なの意で、略して一般にグロと云つて居る。グロとエロは一九三〇年の寵児である。(二四三〜四頁)

○ナンセンス Nonsense 英 無意味な全く馬鹿々々しいこと。理屈や理論は抜きにして馬鹿げた可笑しさのあるもの——漫語や笑話、小咄、コントの類がナンセンスの氣持をよく示してゐる。現代人が切実に欲求する明るさや笑ひは、ユーモアからもベールソスからもウイツトからも湧かない。そこで何でもないことが可笑しいといふ可笑しくもないことを考え出したわけである。(三五三頁)

以上のように、同時代の新語辞典で確認する限り、「エロテック」「グロテスク」の用例が先行して存在し、一九三〇年になつて両者が略語化された「エロ」、「グロ」にはよりの性的な意味が加わつてゐる。それにともない、「エロテック」に關しては「恋愛文学」、「グロテスク」に關しても「裝飾様式」であるという意味が希薄になつてゐる。だがこれを單純に変化ととらえるには多少の留保が必要である。一九三〇年の例に挙げたものは、文芸用語のみを対象としたわけではなく、風俗文化全般を扱つた「モダン」語の辞典である。むしろ「エロ」と「エ

ロティック」、「グロ」と「グロテスク」の違いに注意を払い、「エロ」、「グロ」、そして「ナンセンス」が一九三〇年になって一つの「傾向」として把握された点、そして、それらの「傾向」を「モダン」という用語が包括していた点をあらためて押さえておくべきだろう。

鈴木貞美は「モダン」という用語が流行する以前、明治中期には「ハイカラ」、そして日露戦争後には「近代主義（モダニズム）」が流行したと指摘する（『モダニズムと伝統』もしくは『近代の超克』とは何か、前掲『関西モダニズム再考』所収、三八六頁）。また、一九二六年に流行語となった「モダン・ガール」の「モダン」は、「当世のヨーロッパやアメリカに見られるのと同様の」（三五九頁）という意味があつたと説明しているが、「エロ・グロ・ナンセンス」によつて代表される「モダン」も同様に捉えることが可能なのか。さらに検討を加えてみたい。

三、「文学」と「生活」の「モダン」

新語辞典で確認した「傾向」はたしかに新聞、雑誌でも確認できる。『朝日新聞』のデータベースでは、一九二九年一月二七日の「エロの乱舞」を皮切りに、一九三〇年には「帝都のエロ一掃」（九月三日）、「エロと先鋭の意見が対立」（十月三日）といった見出しが登場し、「エログロ野球戦」（十一月二日）、「これがエロとグロの基本図か」（二月三日）等が続く。また「ナンセンス」に関しては、一九二九年二月一七日の「春の流行」

ナンセンス物語」に始まって、一九三〇年六月以降、コンスタントに見出しに登場する。また、『読売新聞』のデータベースでは、一九三〇年に入るとすぐに、「血みどろのエロとグロに殺生関白を彩る」（二月五日）といった記事が見られ、「ナンセンス」に関しては連載で「選挙ナンセンス」（二月一日〜二月六日）という記事が登場する。ほかにも、「エロとナンセンス」（七月二四日）といった見出しもあり、さらに一九三〇年一月一五日には、「エロ・グロ・ナンセンス」が一語となつて見出しに登場する。

「エロ」と「グロ」が近接している経緯に関しては、秋田昌美『性の猟奇モダン』（前掲）が中村古峯、梅原北明、斉藤昌三、酒井潔などの系譜をたどり詳しく論じている。ここでは、「変態」という語を媒介として精神異常や性的倒錯への関心が高まり、『変態・資料』（一九二六〜二八年）、『グロテスク』（一九二八〜三一年）、『犯罪科学』（一九三〇〜三三年）といった雑誌や、『変態十二史』シリーズ（一九二六〜二八年）、『近代犯罪科学全集』、『性科学全集』（武俠社、一九三〇・一九三二年）などの刊行が続いたことが指摘されている。前節で紹介したように、「グロテスク」に「変態的」の意味が加わる（『モダン語辞典』）のもそのためである。「変態心理」が「変態性欲」へと接続し、さらに猟奇犯罪へと対象を移行しながら、「エロ」と「グロ」とは密接に結びついていた。

では「ナンセンス」についてはどうか。前節で確認した『モダン用語辞典』では「漫語や笑話、小咄、コントの類」が挙げ

られ、『読売新聞』でも「選挙ナンセンス」の連載から「ナンセンス」という語に注目が集まっていた。領域を特定して「ナンセンス」の発生を探するのは先行研究もないため困難である。

そのため、さまざまな記事が集まるであろう週刊誌に注目してみると、『週刊朝日』の総目次（山川恭子編集、ゆまに書房、二〇〇六年）では、服部泰三「ナンセンス行進曲」（一九二八年六月）、小出樽重「毛皮の禪（ナンセンス物語）」（一九二八年一月）、柳家小さん「ナンセンス都々一考」（一九二八年二月）、小野田素夢「銀座・ナンセンス・春」（一九二九年四月）といった記事を確認することができる。

また、『サンデー毎日』の総目次（山川恭子編集、ゆまに書房、二〇〇七年）では、『週刊朝日』よりも一年後の一九二九年に「ナンセンス」を冠した見出しが登場するが、より特徴的なのは、「ナンセンス号」（一九二九年九月八日）、「ナンセンス」（一九三〇年五月一日）、「誌上ナンセンス大会」（六月一〇日）、「モダン・ナンセンス集」（六月三日）、「夏のナンセンス」（八月一〇日）、「ナンセンス実話・懸賞入選」（九月七日）、「ナンセンス実話」（九月一四日）といった特集を組んでいることである。個々の特集では小説、漫画、笑話、馬鹿噺、新作落語、漫才、新浪曲、実話など多様な「ナンセンス」が掲載されている。

そのなかで、文学については、小林真二『ナンセンス文学』の様相——中村正常を中心に——（筑波大学 文芸・言語学系『文芸言語研究』文芸篇三四号、一九九八年）が、「合作なんせんす物語」ユマジベソコシリーズで、中村正常が井伏鱒二とともに『婦人

サロン』（一九二九年一〇月〜一九三〇年三月）に連載していた時期を「ナンセンス文学」の萌芽と指摘している。

「ナンセンス文学」に注目して、昭和初期に創刊された文芸誌を確認してみると、『文学時代』（一九二九〜三年）が「ナンセンス・ルーム」という記事を一九二九年八月から一九三一年二月にかけて掲載している。ほかに、大宅壮一「意味のあるナンセンス」（一九二九年九月）、中村正常「ナンセンスの抗弁」（一九三〇年五月）も掲載されている。

『文学時代』とほぼ同じ時期に刊行されていた『近代生活』（一九二九〜三年）の場合は、「エロ」と「ナンセンス」が結びついた特集「エロティック・ナンセンス」（一九二九年一〇月）から「ナンセンス」の潮流が始まっている。丸木砂土「秋の兵隊」、岩田豊雄「裸島」、三沢伸子「エロ・ナンセンス書簡集」が掲載されたこの特集の後、「事実ナンセンス」（一九二九年二月）では、堀口大学、サトウ・ハチロー、中村正常、浅原六朗、「夏のナンセンス」（一九三〇年八月）では、龍胆寺雄、阿部ツヤコ、飯島正、「都会ナンセンス」（一九三〇年二月）では、下村千秋、林芙美子、堀口大学、奥村五十嵐、山田一夫、川端康成の小説が掲載されている。また、龍胆寺雄「ナンセンス文学論」（一九三〇年二月）、阿部知二「ナンセンスとは？」（一九三二年四月）も掲載されている点で、『近代生活』は「ナンセンス文学」の流行に重要な役割を果たしたといえるだろう。

既存の文芸誌では、『中央公論』が特集「貧乏ナンセンス物語」（一九三〇年九月）を組み、『改造』では赤神良讓「ナンセン

スの社会学」（一九三〇年九月）が掲載されるなどの動きがある。また、『新潮』が「ナンセンスとエロチシズムに対する社会的考察」（一九三〇年一月）という特集を組んでいる。

このような記事を確認すると、「エロ」を媒介として「グロ」と「ナンセンス」が接続され、「エロ・グロ・ナンセンス」が出来上がったという説明も想定される。しかし、それはたんに「エロ」の要素が別の二つを覆いつくす程に大きな領域だっただけかも知れない。また、「エロ」「グロ」「ナンセンス」がそれぞれ別の要素と結びついていた可能性も否定できない。たとえば、『文学風景』という雑誌の一九三〇年一月月号で組まれた特集「一九三〇年の風景よきようなら」を飾ったのは以下の項目である。（「エロチシズム」の執筆者は吉行エイスケ、「グロテスク」の執筆者は赤神良謙、「ナンセンス」の執筆者は中村正常。）

「ノン・ズロオス」「観光局」「銀座」「ラゲビー」「ブローリー中尉」「旅客船」「音楽」「ナンセンス」「競馬」「アメリカ」「モダーン・ガール」「舞踊」「科学小説」「シユル・レアリスム」「共同製作」「婦人問題」「プロレタリア文芸」「カジノ・フォーリイ」「新興芸術派」「エロチシズム」「カフエ」「トーキー」「文芸評論」「ロシヤ」「野球入場券問題」「流行」「グロテスク」「形式主義」「麻雀」「女生とサイン」「ソヴエート映画」

これらの項目が列挙された「一九三〇年の風景」には、イデ

オロギーの対立、あるいは高級文化／低級文化の区別といったものはなく、「エロ・グロ・ナンセンス」の周囲は渾然一体となつているようにも見える。しかし、実際には、さまざまな線引きが生じていた。たとえば、『新潮』の一九三〇年二月の座談会「モダンニズム文学及び生活批判」では、エロティシズムとナンセンスに関する議論が中心となるが、それらは「文壇以外に多くある」という川端康成の発言が出てくる（一三六頁）。

また、グロテスクについてはほとんど言及がなく、「浅草のモダン」は「グロテスク」とたつた一箇所言及される。これは「銀座」が「ハイカラ」であることと対照においてなされたものであり、「浅草」については「大衆のモダンニズム」であるとも指摘される（一四四頁）。そもそも座談会のテーマが「モダンニズム」の「文学」と「生活」を対象としているのは、そこに高級文化／低級文化の区別を見いだそうとする意志が介在しているようにも見える。千葉宣一『モダンニズムの比較文学的研究』（おうふう、一九九八年）は、同座談会をはじめ、文学界において「モダンニズム」という用語に注目が集まったのが一九三〇年であったと指摘している（二七、七二頁）。「モダンニズム文学」という用語が大きく扱われるようになったのも「一九三〇年の風景」の一つと考えるならば、見方を変えれば、高級な「モダンニズム文学」と低級な「エロ・グロ・ナンセンス」とを区別しなければならぬ焦りがそこにあったとも考えられる。その一方で、「ナンセンス」の勃興に一役買った「モダンニズム文学」の雑誌が『近代生活』というタイトルであったりもする。こうして、対立をし

つつも、単純には両者を切り離せない状況のなかで昭和の「モダン」が形成されていったのである。

四、「生活哲学」としての「感覺的刺激」

前節の終わりで「エロ・グロ・ナンセンス」の見取り図となる一例を示したが、その集大成はやはり『現代猟奇尖端図鑑』であろう。これは図版が二〇〇頁を超える大型ビジュアル本である。同書を収録した『コレクション・モダン都市文化 一五 エロ・グロ・ナンセンス』（前掲）の解題（島村輝）でも指摘されているように、「新潮社のような出版社からも、このような企画本が出版されていたという事実そのものが、この時代のトレンドをなによりも雄弁に語っている」（六三七頁）。

ただし、「エロ・グロ・ナンセンス」が先頭から整然と並べられるなかで、それまでとは異なる点も生じている。まず『コレクション・モダン都市文化 一五』の巻末エッセイ（島村輝）で指摘されているのは、「グロテスク」をめぐる変容である。雑誌『グロテスク』などで試みられていたのは「度重なる発禁処分を受けながら」も「メジャーな出版社が結局取り込むことのできなかつた『裏』の世界への通路を切り開くことだった。（六三四頁）」とあるが、『現代猟奇尖端図鑑』では、図像にしても、新居格の寄せた「グロテスク序説」にしても、「表層文化の中に馴染された」部分しか提示されていないという（六三五頁）。

同様にこの図鑑から消えているのは、解説やシルババーグなどが指摘している「グロテスク」とプロレタリアとのつながりである。これは前節の「一九三〇年の風景」にも出てきたし、『モダン用語辞典』（前掲）の「特に現代は三S時代と云はれ、又三口時代とも云はれる。三Sとはスピードとスポーツとスクリーンであり、三口とはエロ、グロ、プロを指してゐる。」といった前書きにも見られたものである。「エロ・グロ・プロ」という結びつきは、その先に「テロ」を見据えてもいる。秋田昌美『性の猟奇モダン』（前掲）では、雑誌『人の噂』（一九三二年五月）では「エロ・グロの後に来るものは何か」という問いを著名人に行つた結果、「テロ」が一番多かったと指摘されている（一三〇頁）。たしかに、『現代猟奇尖端図鑑』の巻末に収録された赤神良讓「尖端の心理学」では、「強烈なる刺激に充てる社会は、更に一層強烈なる刺激を求め、遂には猟奇的となり、変態的となり、グロとなり、テロとなり、犯罪的となり、殺人的となり、悪魔的となり、極度に現代社会をウルトラ化して行くのである」（付録四五頁）と結論づける。しかし、付録の最後の頁でようやくその片鱗をうかがうことができるものの、『現代猟奇尖端図鑑』の全体を通して「グロ・プロ・テロ」の要素が配置されることはない。

だが、「グロテスク」ばかりが変容を遂げていたわけではない。小林真二『ナンセンス文学』の様相（前掲）では、「ナンセンス文学」にみられる「イデオロギー文学のアンチ・テーゼ」、「価値転倒」の側面（四一頁）、あるいは「抒情性」が指摘され

ていて(三二頁)、こうした点も消えていった部分であろう。また、シルババークの論文でも、「ナンセンス」と社会批判との関係を指摘している(九六、九七頁)。同じことは「エロ」についてもいえる。菅野聡美『(変態)の時代』(講談社、二〇〇五年)は、梅原北明が主催した雑誌『グロテスク』に関して、「エロよりもグロに重点をおくことで発禁を回避」したと説明している(一五七頁)。つまり、これと比較してみた場合、『現代猟奇尖端図鑑』は堂々と冒頭から「エロ」の図像が巻頭を飾ることができている状況であり、その危険性もまた馴致されているのである。このような点を確認するならば、「エロ」「グロ」「ナンセンス」の概念が生み出される文脈においてそれぞれが持ついた対抗意識がどのように絡まりあい、また、どのように変化していったのかをあらためて検証する必要がある。

その一方で、『現代猟奇尖端図鑑』であらたに加わった要素は何だったのかという疑問も生じる。ビジュアル重視の紙面になつて前面化したのは奇抜さへの志向である。「エロチック」、「グロテスク」、「ナンセンス」に引き続き、「レビュー」、「スポーツ」、「ポーズ」のそれぞれの後に、「奇観」、「尖端」、「珍奇」という項目がたなぎ目に入る構成はやはり特徴的である。

「レビュー」や「スポーツ」が「奇観」「珍奇」といった項目と並んでいるのは、今日的な視点では不思議に思えてくる。

大宅壮一は、こうした状況について「近代社会色」(『毎日年鑑』一九三三年)のなかで次のように指摘している。

今やエロ・グロ・ナンセンスは、シネマとカフエと芸術派文学との間を泳いでゐる一部尖端人の趣味から離れて、殺人的不景気と、失業ならびに失業の不安によつて、生活の経済的基礎とともに従来(の)生活指導精神を失ひつゝある一般大衆、殊に抵抗力のもつとも弱い中間層の生活哲学になつて来たのである。

前途は希望を失ひ、生活に緊張を失つた大衆がまづ第一に要求するものは、強烈な感覚的刺激である。ところで、感覚の世界を支配するものは、高度ではなくて強度である。そこで一方では、野蛮美——音ではジャズ、色では原色——の復活となり、他方では、演劇よりもシネマ、シネマよりもレヴュー、レヴューよりも女給または私娼といった風に、エロチシズムの含有量のより大なるものに対する要素がますます増大して行くのである。(二〇五、二〇六頁)

「一部尖端人の趣味」が「一般大衆」に受け入れられ、「中間層の生活哲学」へと変貌を遂げるとき、それぞれ別の要素であった「エロ・グロ・ナンセンス」は一体となり、「強烈な感覚的刺激」として享受されていた。その刺激がさまざまな対抗意識から生じたといった思想性などは問題ではなく、「殺人的不景気と、失業ならびに失業の不安」を紛らわす「強度」が重要になつていたのである。

ここで注目したいのは、『現代猟奇尖端図鑑』において、「強

烈な感覚的刺激」が人種／民族の思想性を帯びて体现されている点である。レイ・チョウのいう「文化翻訳」の問題がこうした議論と接続してくる。「グロテスク」の項目に掲載された図版は、黒人、南洋のイメージが色濃く配置されている。また、黒人ダンサーのジョセフィン・ベイカーが「エロ」「レビュー」の双方に登場し、欧米のエキゾティシズムを受容した痕跡は随所に確認できる。もちろん、これは「野蛮」な美を文化の再生と結びつけようとする「バーバリズム」が、日本においても受容されたということになるのだが、付録に掲載された中野江漢「支那の怪奇風俗」における「支那は、エロ、グロの国である。支那の風俗は、五千年といふ、長い年月を閲して、エロとグロとの絆で織られた布のやうなものである」（付録三八頁）といった記述とどのように関わってくるのかがあらためて問題となつてこよう。

また、引用した文章が「ナンセンスの生活化」という見出しになつている点を敷衍してみるならば、『現代猟奇尖端図鑑』の「ナンセンス」において様々なアメリカ人の「ナンセンス」な格好を取り上げたのは、世界恐慌の発信源であるアメリカ経済・政治・文化の「ナンセンス」ぶりを暗示している可能性も出てくる。そして、「エロティシズム」については、裸体の図版が多く掲載され「エロチシズムの含有量」が多くなるばかりでなく、「日本人」の姿が多くなっている。より身近になつた裸形の肉体をどのように扱うのか。これは「レビュー」「スポーツ」「ポーズ」という大項目とも関わり、「身体」を記号とし

てどのように扱うのが「昭和モダン」の大きなテーマとなつていることを示す。

欧米の「モダン」な文化を、日本では「エロ・グロ・ナンセンス」として翻訳していったのは、そもそも欧米の「モダン」にそうした要素があつたからであつて、さまざまなグループが介入しつつ露骨に示して見せた結果だといえる。だが、たんに模倣によつてオリジナルの性質を浮き彫りにしたことだけが問題ではない。混沌としているように見える「感覚的刺激」のオンパレードが人種／民族の思想性をともなつていることも重要であり、ひとつのタブーとして「大衆」に提示され、「生活哲学」として享受された文化の論理が、戦争の時代へ、総動員体制の時代へとどのように引き継がれたのかもまた大きな問題である。図版の示すあからさまなエキゾティシズムは、「一部尖端人の趣味」を拡大し、露呈させたものなのか。『現代猟奇尖端図鑑』は、メディア間の翻訳とともに階級間での翻訳が果たした役割をも想起させる。このようにして、「エロ・グロ・ナンセンス」の考察は、活字メディアと映像メディア、知識人と大衆、美学と政治学との関係を問い直す作業へと接続する可能性を秘めている。

五、昭和モダンと上海モダン

前節では『現代猟奇尖端図鑑』の例を挙げて日中間のエキゾティシズムの問題を指摘したが、そうした例を挙げるまでもな

く、日本人モダンリストと大陸のモダン都市上海とは密接につながっていることが知られている。和田博文共編著『言語都市・上海―一八四〇・一九四五』（藤原書店、一九九九年）、劉建輝『魔都上海―日本知識人の「近代」体験』（講談社選書メチエ、二〇〇〇年）、趙夢雲『上海・文学残像―日本人作家の光と影』（田畑書店、二〇〇〇年）などでもすでにその概要を知ることができる。

また、上海との人的交流についてまとまった研究を行っている日本上海史研究会は、『上海人物誌』（東方書店、一九九七年）、『上海職業さまざま』（勉誠出版、二〇〇二年）などの著書を刊行している。こうした著書をたよりに多様な交流の軌跡を追跡することも可能である。

同様に欧米においても「上海モダン」関係の研究書が刊行され、展覧会も開催されている。(Leo Ou-Fan Lee *Shanghai Modern: The Flowering of a New Urban Culture in China, 1930-1945*. Cambridge: Harvard University Press, 1999. Jo-Anne Birnie Danker, Ken Lum, and Zheng Shenglian, eds. *Shanghai Modern 1919-1945*. Munchen: Museum Villa Stuck, 2004.) など。本国でも前者の中国語版（李欧梵『上海摩登 一種都市文化在中国 一九三〇―一九四五』毛尖訳、北京大学出版社、二〇〇一年、北京）が出版された後、陳子善編『夜上海』（経済日報出版社、二〇〇三年、上海）、余之『摩登上海』（上海書店出版社、二〇〇三年、上海）呉紅『老上海摩登女性』（中国福利会出版社、二〇〇四年、上海）といったアンソロジーや研究書等が刊行されている。

摩天楼が聳え立ち、列強諸国の租借地の文化が交差する上海の光景に日本人が憧憬を抱いたことは想像に難くない。その一

方で、前節でも触れた「支那の怪奇風俗」にみられるような「野蛮」さも強調されていた。この点に関して、「自己植民地化」、

「植民地近代」、「半植民地性」といった用語での把握がなされている。(井上薫『上海漫画』にみる自己植民地化と「他者」――「世界

人体之比較」を中心に)『現代中国』七六号、二〇〇二年、『東アジアにおける植民地的近代とモダンガール』収録の坂元ひろ子「漫画表象に見る上海モダンガール」、William Schaefer, "Shanghai Savage," *Positions*, 11.1: spring 2003 (Duke University Press)。それぞれ、上海の出版文化にみられる「野蛮」の表象を、上海の自己表象であると分析している点は非常に興味深い。梅原北明も『文芸市場』（一九二五―一九二七年）の編集に関わっている当時から、上海に滞在している。彼らの押し出した「グロテスク」路線の源泉が、上海における自己表象としての「野蛮」と連続しているとも考えられる。そうなること、欧米のまなざしを通して形成された上海のエキゾティシズムが、さらに日本に受容されたときどのように変化したのかという新たな疑問も生じてくるだろう。

とはいえ、中国から日本へとという一方的な受容ではなく、日本の新感覚派文学については、李征『表象としての上海』（東洋書林、二〇〇一年）が詳しく論じていて、上海における新感覚派が日本の新感覚派文学を翻訳した状況が明らかにされている。また、雑誌『漫画生活』には坂元論文でも指摘があるように岡本一平の文章が三回掲載されている（論漫画）一号・一九三四年九月、『現代世界漫画界之鳥瞰』二号・一九三四年一〇月、『西洋漫画史略』四号・一九三四年二月）。ほかに、新居格の文章「上海第二印象」

が掲載されている（複製版に収録、上海社会科学院出版社、二〇〇四年）。

これは「支那を斯く見たり」（『改造』一九三四年八月）の第二節「上海を見直す」の翻訳である。さらに一三号（一九三五年九月）の目次には柳瀬正夢の書いた画が掲載されている。こうした相互の関係性は多くの分野で目にするができるだろう。

くわえて、上海における日本人の文化活動という面では、現地日本語新聞の存在が知られている。だが詳細は明らかにっていない。日本国内では『上海日報』が一九三四年三月から一九三八年二月、『上海日日新聞』が一九三一年一月から八月、一九三三年五月から一九三七年四月までが所蔵されているだけである。この点に関して上海市図書館の徐家匯別館にある『上海図書館蔵外文旧報紙目録稿』（一九七七年）で確認したところ、『上海日報』については一九二九年一月、一九三二年八月から一月、『上海日日新聞』については一九二九年一月、一九三二年八月から一九三四年三月、一九三五年七月、一九三七年一月、一九三七年三月、同年五月〜八月分を所蔵していると記録されている。また、『上海毎日新聞』も存在し、一九三二年八月から一九三四年三月まで所蔵とある。

そのなかで、たとえば『上海毎日新聞』（朝刊）には、森次勲「芥川龍之介と上海」（一九三三年九月一七日）、森次勲「中国のあゝる風景（散文詩）」（一九三三年九月二〇日）、群司次郎正「アメリカを横切る」上、中、下（一九三三年九月二〇日、二一日、二二日）、村山知義「映画雑感」（一九三三年一〇月一九日）、伊藤永之介「文学の危機」A、B（一九三三年一〇月二三日、二三日）といった文芸

記事が存在した。

また連載小説についても夕刊の一部しか確認できなかったが、その範囲でいえば、純文学と歴史小説の二本立てで、それぞれ以下のようなものが存在する（一九三二年八月二三日〜一九三三年一月三〇日、ただし一九三二年一〇月分を除く）。

●「純文学」

○須藤一「更正」（第一〇九回、瀧秋方画）一九三二年八月二三日

〜（第三〇回）一九三三年二月八日

○高橋新一郎「塑像の舞踊」（中座良隆画）一九三三年二月九日

〜（第六一回、休載）一九三三年五月六日

○邦枝完二「青春は輝く」（友枝秀春画）一九三三年五月八日

（第一三回、以後朝刊）一九三三年五月二三日

*五月二四日から六月六日まで小説の連載なし

○山本三八「世紀の戒律」（伊勢良夫画）一九三三年六月七日

（第二五回）一九三三年一月七日

○貴司山治「迷路の裸女」（星野達三画）一九三三年一月一〇日

日〜（第七回、以後未確認）一九三三年一月三〇日

●「歴史小説」

○橋爪彦士「血吹雪」（第二二回、竹内静古画）一九三二年八月

二三日〜？

○直木三十五「寛永卅乱れ」（第三回、挿絵記録もれ）一九三二年

一月一日〜（第二九四回）一九三三年一月三日

○子爵 柳生俊久「柳生秘史 活人剣」（瀧秋方画）一九三三年一月五日（第三回、以後未確認）一九三三年一月三〇日

（このほかにも、『上海日報』（朝刊）では魔沙留「ナンセンス 一千一夜 上海五人男」といつた連載や存在したり（第八回、一九三二年九月二日、第九回、九月六日、第一〇回、一九三二年九月七日）、上海の日本人ジャーナリストが主人公の連載小説、奥田杏花「カプエーの娘」（四面、一九三二年九月一四日）第一六回、一九三二年一〇月四日まで）や、浦汀漁郎「コスモスの花菱む頃」（一九三二年一〇月七日）第一九回・一九三二年一〇月三〇日、以後未確認）などが存在する。ここに挙げた情報は非常に限られていてかなり心もとない。だが、それは調査に充てた時間の制約や資料劣化による閲覧の制限だけでなく、上海事変後の混乱も含めて、上海における日本人と「上海モダン」との関わりをさらに明らかにするために、今後は現存する資料のデジタル化などに関する共同作業が必須となるだろう。

六、ソウルの「エロ・グロ・ナンセンス」

本稿の冒頭で挙げたように、韓国でも『エロ・グロ・ナンセンス』という研究書が出版されている。これは従来、韓国では「モダニズム」をマルクス主義、あるいは民族主義による抵抗運動との関係に重点をおいて論じる傾向にあったのに対して、

近年、より日常的な生活に焦点をあて、大衆文化を対象とした新たな試みが進められているためである。その一端は日本語に翻訳されていて、金振松著『ソウルにダンスホールを許可せよ 一九三〇年代朝鮮の文化』（川村濤監訳、法政大学出版社、二〇〇五年、原著は一九九九年）、申明直著『幻想と絶望 漫文漫画で読み解く日本統治時代の京城』（岸井紀子、古田富建訳、東洋経済新報社、二〇〇五年、原著は二〇〇三年）などがある。

とくに後者に関しては、「読むべき文献資料」という欄を設けて同時代資料を多数掲載して、非常に参考になる。そのなかで、「モダニズム」に関わる用語が目立つようになるのが、一九三〇年前後であったことが分かる。たとえば、雑誌『新民』の赤羅山人「モダン数題」（五九号、一九三〇年七月）と、呉石泉「モダニズム戯論」（六七号、一九三一年六月）、そして、雑誌『別乾坤』の壬寅生「モダニズム」『別乾坤』一九三〇年一月がその例である。実際、『新民』の目次を確認してみると、いま挙げた二つの記事だけが「モダン」ないしは「モダニズム」という語を見出しに採用している。『別乾坤』の場合は、エッセー欄「モダン福徳房」が一九三〇年を通して掲載され、同じ一九三〇年五月からは特集「モダン大学」が組まれるようになり、五月は、Unfortunate professor「超特モダン生活戦術」、魚魯弁「新処女『無智隠蔽術』」、ニコライ・モダンスキー「モダン考行法講義」、六月はモダン・モーセ「現代都会生活五戒命」、スクリーン・サルジ「高級映画ファンになる十大秘訣」が掲載されている。さらには、「ナンセンス特設館」（一九三〇年八月、然

浩堂人「ナンセンス人間」(一九三〇年九月)といった記事も見られるようになる。

また、研究空間(スユキノモ)近代メディア研究チーム編『新女性 メディアにみる近代女性風俗史』(ハンギョレ新聞社、二〇〇五年、ソウル)を見ると、図版のなかで、「モダン新語辞典」(一九三一年一月)に「グロ」、「ナンセンス」の項目が掲載されている(一三八頁)。雑誌『新女性』は一九二三年から一九二六年まで刊行された後、ふたたび刊行されるのが一九三一年なので、その間の動向は把握できない。しかし、南宮桓「モダン女学生風景」(一九三二年四月)、尹芝薫「モダン女性十誠命」(一九三二年四月)、「モダン語辞典」(一九三二年六月)、金乙漢「モダン結婚風景」(一九三二年一月、一月)という見出しなどが存在するなど、非常に興味深い雑誌である。

さらにはソ・レソプ『エロ・グロ・ナンセンス 近代的刺激の誕生』(前掲)では、雑誌『新東亜』における「モダン語点考」の欄に焦点が当てられている。一九三一年一月に創刊された同誌は一月以降、一九三三年九月まで断続して新語の辞典を掲載する。そのなかで、一九三二年二月「エロ」、四月「ナンセンス」、九月「モダニズム」、一九三三年一月「グロテスク」を載せている。「エロ」「グロ」「ナンセンス」の三語については以下の通りである。

○エロ (Eroticism) : 英語。英語の「エロティシズム」だが、それを略して、ただ「エロ」と言う。たいへん流行

している言葉で、すなわち「恋愛本位」または「色情本位」という意味で、一転して「淫蕩」する意味で広く使われる。「現代人はエロを好む。」「最近の雑誌は急速にエロ化している。」などのように使える。形容詞は「エロティック」である。それゆえ「B君はそんなにエロティックではないけません。」や、「あの映画はエロティックすぎる。」などと使える。(五一頁、拙訳)

○グロテスク (Grotesque) : 英語。奇怪なという意味で、あまりにエロティックなこと、その程度を超えていることもグロテスクだと使う。たとえば、食人種のダンスのようなことをグロテスクな場面だといえる。略して「グロ」と使うことよって、「エロ」と「グロ」がいつも並行していることが二〇世紀ウルトラモダンの好むところだ。(二二頁、拙訳)

○ナンセンス (Nonsense) : 英語。「無意味」という意味で、ただの無意味ではなく、ちぐはぐでおかしいという意味だ。何の意味もおかしい、あきれたおかしさ、あり得ないおかしさなどを意味する。またあるときは「とんちんかんなジョーク」という意味で通用する。「あの活動写真はナンセンスだ。」というふうに使うこともできるし、「A君婚約したんだって」といわれたとき、「オー、ナンセンス。」と答えることもできる。(二六頁、拙訳)

それぞれの定義について、そのまま対応する日本の新語辞典をいまだ特定できてはいない。しかし、本稿でも見てきたような新語辞典の類を参照していることは明らかである。「新東亜」では、李晶燮「乱舞するエロのパリ」（一九三二年二月）、竜岳山人「エロ、グロ、恐怖の乱舞 国際都市上海」（一九三三年三月）といった記事も存在し、辞書だけにはとまらない状況にあったと推測することができる。

だとすれば、「昭和モダン」、そして「上海モダン」にみられたような「プリミティブ」への情熱がソウルでも展開したのか。「ソ・レソプ」「エロ・グロ・ナンセンス」では「エロ・グロ」と「ナンセンス」を分けるというかたちで議論が進む。これが本稿での考察と同様の次元ということになるのか。雑誌『新東亜』においてもさまざまな文学関係記事、たとえば、安懷南「日本文壇 新興芸術派考——プロ派、既成派との対立——」（一九三二年二月）、安懷南「日本文芸 新興芸術派の代表的理論」（一九三三年一月）、宋仁楨「探偵小説小考」（一九三三年四月）、金起林「現代詩評論（二）「ポエジー」と「モダンテイ」」（一九三三年七月）といったものがある。他の雑誌記事などを参照して、さらに検証を進めることも重要となってくるだろう。

「昭和モダン」と「アジア」という図式を立ててしまうと、日本と中国、日本と韓国という比較にならざるを得ないが、別の広がりももちろんあり得るだろう。李光鎬編『韓国の近現代文学』（伊相仁・渡辺直紀訳、法政大学出版局、二〇〇一年）に収録さ

れた金允植の論文「韓国文学の二つの指向性の弁証法」（初出は『月刊文学』一九七四年二月）に、「一九二〇年代の韓国で『モダン（毛断）ガール』なる言葉が流行したことがある」（二七頁）という記述がある。十分な量の用例を確認してはいないが、崔貞熙「尼奈の三幕の記録」（『新女性』一九三一年二月）には「モダン（毛断）」と書かれている箇所がある（一〇二頁）。これは岸田劉生が一九二七年に「毛断嬢」と名づけたことを契機としているが、陳芳明『植民地摩登 現代性と台湾史観』（麦田出版、二〇〇四年、台北）によれば、一九三〇年代、「毛断」の語が台湾でも流通していたという（二三頁）。そうなると韓国と台湾の「モダン」について比較するという視野も開けてくる。また、上海モダンを指す際にしばしば使用されている「摩登」との関係はどのような位置にあつたのかという興味もわいてこよう。

こうした文化翻訳の複雑な網目を検証していくことは、「日本人」というナショナル・アイデンティティそのものの見直しにも接続する。当時の「日本人」という枠組みには現在の韓国・北朝鮮ならびに台湾の人々が含まれていた。そこで語られるナショナル・アイデンティティは、東アジアにおける文化的・政治的な葛藤と調停によって成立する。では「モダン」をめぐるさまざまな文化的越境を経由したという前提に立つとき、一九三〇年代半ばから顕著となる「日本回帰」の議論はいかなる意義を持ちうるのか。遠藤不比人共編『転回するモダン——イギリス戦間期の文化と文学』（研究社、二〇〇八年）で取り上げられている『イングリッド』ないしは『イングリッシュネス』と

いう表象への固着が支配的（かつ症候的）な『三十年代』のイデオロギー的オブセクション——『拡大する帝国』から自国文化へと退行する傾向」、すなわち「人類的転回」が日本でも起こっていたのか（はじめに）vii頁。なお、「人類的転回」については以下を参照。Jed Esty, *A Shrinking Island: Modernism and National Culture in England* (Princeton: Princeton University Press, 2004.)。

個々の課題を追求することによって、ふたたび「モダニズム」研究における横断的動向との接続が確認される。この意味で、本稿の取り組む分野は、今後、共同研究の重要性がさらに増してくるだろう。

【付記】

① 原稿の作成にともない、以下の二カ所を訂正している。

① 五九頁上段九行目「一九三一年六月から八月」を「一九三一年一月から八月」にした。

② 五九頁下段二三行目「寛正」を「寛永」にした。

※ 本稿は科学研究費補助金「昭和モダンの生成にみる文化翻訳のポリティクス」（若手研究B、平成一九〇二〇年度、課題番号一九七二〇〇七八）による研究成果の一部である。

（九州大学大学院比較社会文化研究院准教授）